

学 界 報 告

[学 会 名]

国際教育哲学会 (International Network of Philosophers of Education)

[参加セッション名]

CONCURRENT PAPER SESSION

[発 表 題 目]

J. A. コメニウスにおける希望の原理と教育 (The Principle of Hope and Education according to J. A. Comenius)

[大会 期 間]

平成 30 年 8 月 13 日 (月) ~
平成 30 年 8 月 17 日 (金)

[場 所]

イスラエル、ハイファ

国際教育哲学会 (International Network of Philosophers of Education) は、1988 年にハンガリーで第 1 回大会を開催し、ほぼ 2 年に 1 度、世界各地で大会を開催している。2008 年には京都で開催されており、私は 2012 年にエチオピアで開催された大会で発表し、今回が 2 度目である。同学会は、教育の伝統や教育へのアプローチの多様性を尊重することをうたっており、さまざまなテーマでの報告やシンポジウムが実施される。

今回のテーマは「教育、対話、そして希望」。トランプ政権のイスラエル寄りの政策が、中東の政治状況の不安定さを増大さ

せるなか、非常にアクチュアルなテーマ設定になったといえる。8月中旬の夏期スクーリングを担当し、8月13日、関空からパリ経由でイスラエル入りした。会場は、イスラエル北部の地中海に面するハイファ。イスラエル入国にそれほどの厳しいチェックはなかったが、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒が祈りを捧げる光景の一方で、機関銃を手にした男女の兵士が目につき、考えさせられることが多かった。

私は、西洋教育史の代表的人物であるコメニウスを研究している。彼はヨーロッパが三十年戦争に見舞われ、宗教的・文化的・政治的対立に陥った状況を受けとめ、教育のみならず、政治・宗教・文化等にわたる足跡を残した。しかしながら、教育以外の分野での彼の思索は十分に顧みられていない。今回の大会テーマに関していえば、コメニウスは、キリスト教神学の三徳である信仰・慈愛・希望を、社会の改善課題としての哲学・政治・宗教と関連づけ、さらにそれを過去・現在・未来に関連づけて論じている。大会の趣旨説明には、哲学者ブロッホの言葉が引かれているが、希望は自身の取り巻く環境を異なった仕方とらえる能力に関わっている。コメニウスの宗教思想の基本的な方向性をベースに彼の教育思想を見直すと、彼が『世界図絵』や『開かれた言語の扉』といった教科書を著したのは、混乱に満ちた世界を読み解き、他の可能性において世界を見るという高度なリテラシーの育成をめざしていたと解釈される。

大要、上記の趣旨で 30 分ほどの報告を行ったが、日本の参加者からは、コメニウ

スの教育思想において実践知とはいかにとらえられるのか、また、コメニウスはプラトンの洞窟の比喩を教育思想の構想に活かしているが、バベルの塔の比喩についてはどのようにとらえられていたかという質問があった。洞窟の比喩は唯一なる真理としてのアイデアが問題とされ、バベルの塔の比喩は真理の複数性が問題とされている。コメニウスはさまざまなテキストでバベル的状况を指摘しており、今後の考察において非常に示唆的な質問であった。また、海外の研究者からは、コメニウスは教育の有無を救済の条件と見ていたのかという質問があった。コメニウスは、中世キリスト教思想の大家で「学識ある無知」で知られるクザーヌスを読み、最晩年の主著『必須の一事』で世俗的知識をそぎ落とした単純な信仰の必要性を強調した。では、彼が多くの教科書を編纂して学識や道徳性の習得を勧めたことはどうとらえられるか、改めて検討すべきことを自覚できた。

同じセッションでは、ポーランドのトルン大学の研究者が、「許し」(forgiveness)をテーマに発表し、許しを可能にする条件としての「思慮」(prudence)を強調していた。コメニウスが、さまざまな道徳性の基準のうちでもっとも重視したのも思慮であり、彼がキリスト教教会間の和解のための会議で訪れた街のひとつがトルンであり、私は2月に同地を訪れたばかりだった。コメニウスが「許し」をいかに考えていたのかも、今後の考察課題であると受け止めた。

同学会では、大阪大学の岡部美香教授、奈良女子大学の西村拓生教授、同志社大学

の小野文生准教授が、教育学の臨床学的転回と銘打ったシンポジウムを企画したほか、他の日本人参加者による個別発表もあり、日本人の参加者・発表者も、まだまだ十分ではないが増えてきている。新冷戦といわれる状況もあるが、グローバル化という趨勢は変わらないとすれば、国際的な発信や交流はやはり重要であろう。

私は、2018年に本学に赴任させていただいたが、就任初年度に国際学会渡航助成をお認めいただき、教育学部長をはじめ教授会各位のご理解に感激している。また、学術支援課には事務手続きその他でご高配をいただき、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。今後、さらに研究を進めるとともに、その成果を教育に還元できるように精進してまいります。

(相馬 伸一)